

雑感「樹木葬十周年によせて」

住職 千坂げんぼう

樹木葬墓地の構想を実現するために、現在のログハウス悠々庵がある林を買収求めたのが平成六年なので、今年で満十五年ということになる。

この間、色々な困難もあったが、それ以上に「気づき」の楽しさは格別のものがあつた。それ以前の平成二年から平成六年までは、一関の持つ歴史的側面を活かそうと、旧一関藩主田村家と縁がある各地との交流、平泉中尊寺経蔵別当の荘園だった「骨寺村荘園遺跡」の顕彰、旧一関藩家老沼田家屋敷の保存、などに取り組んだ。

田村家との関係は、菩提寺住職としての永遠の課題であるが、後の二つは地域住民や行政に引き継がれたので、私は「露払いの役が終わればよし」として手を引いた。その後、「骨寺村荘園遺跡」は、私たちがお招きした國學院大学の吉田敏弘教授が引き継ぎ、国の史跡指定を受けるところまで進展した。沼田家屋敷は一関市が改修を行い見事に保存に成功した。

また、平成二年から、平泉の「柳之御所遺跡」保存を訴え運動したが、これも平成五年に当時の建設省が遺跡を残す大英断を行い成功した。

このように歴史遺産を大事にしようという機運が高まって、私の出番がなくなつたので、自然を活かした樹木葬に専念出来るようになった事は喜ばしかった。

もちろん周囲の条件だけでなく、私自身の健康状態との関係もあった。ご承知のように、平成六年（一九九四年）に脳溢血を発症した



外来種セイタカアワダチソウの除去

こと、平成十四年（二〇〇二年）に脳腫瘍（下垂体）の手術をしたことで、体力的にも、樹木葬の構想を実現、発展するしかないと考え、平泉のユネスコ世界文化遺産、骨寺村荘園遺跡などの問題にはコメントを避けてきた。いわば周囲の「雑音」には惑わされず、我が道を歩もうとしてきたのである。

おかげで、樹木葬は、「久保川イーハトーブ」というキーワードで、生態系の豊かさ、生物多様性に富む地域を、世界に発信出来るまで近づいた。この間、東京大学大学院・保全生態学研究室にお世話になり、久保川流域（支流・析倉川も含む）の生態の調査をして頂いてこの地域の豊かさを再認識したこと、指導教官の鷲谷いづみ教授のご指導で、世界の文化遺産に関する潮流を学ぶことが出来たことは望外の幸せであつた。

このようなことから、ユネスコ世界文化遺産の評価は、生態系に人間がどのように関わってきたかが、重要な視点であることが分かった。したがって、イコモスが平泉の調査をして、景観を壊している高圧線存在を指摘したのに、その改善に着手せず、文言だけの問題のごとき対応をしているのは、全くの方向ちがいと言わざるを得ない。

ユネスコの世界文化遺産になっているドイツのドレスデン・エルベ峡谷では、観光客増のため峡谷に橋を架けようという動きがある。これに対し、ユネスコは、橋（フォレスト・キャッスル橋）を造れば景観が壊れるのでその際は世界遺産登録を取り消すと言明している。もはや歴史的建造物だけで、世界遺産になる時代ではない。

このような視点を持てるようにしてくれた縁（久保川の自然と私の試みに賛同してくれた人々）に感謝しつつ、新しい「気づき」に感動する日々を送りたいものである。